渡邉博史（左）、永田陽一（右）
ロス在住の写真家、渡邉博史さんが東京・銀座での写真展開催に合わせて来日。オンラインマガジン Fraction Magazine Japan を主宰する永田陽一さんが聞き手となり、海外のフォト事情を対談形式で語ってもらった。

スペシャル対談

渡邉博史 × 永田陽一

［聞き手］

Interview with
A Fine Art Photographer

世界で活躍する、日本人写真家に聞く。アーティストとして生きるには？

文＝水谷充

自分の作品を販売するだけで生活ができたら。そんな夢をアメリカで叶えた人がいます。海外のギャラリーが注目する写真家、渡邉博史。日本のメディアが取り上げてこなかった貴重なお話を直接、伺ってきました。

永田：写真家としてのスタートは遅かったと聞いているのですが、まずはこれまでの経緯を教えてください。

渡邉：写真一本で活動を始めたのは50歳のときです。それまではロサンジェルスでコマーシャルの制作会社を経営していました。もともと大学が日大芸術学部の写真学科だったんですが…。あまり勉強が好きな方ではなくて、写真なら面白そうだと選んだところがありますね。当時、アントニオーニの映画「欲望」を見て、これは楽しそうだと（笑）。綺麗なモデルたちに囲まれて華やかでしょ。いい車にも乗れるし、そういう甘い考えで写真に飛びついたんですよ。と言っても、大学ではそれなりにしっかり学びましたけど。

永田：僕も「欲望」に憧れて写真家を目指しました。

渡邉：あの当時はみんなそうですよね。憧れのフォトグラファーといえば、リチャード・アヴェドンやアーヴング・ペン。ふたりともアメリカを拠点に活動していた写真家です。それで、自分もアメリカに行ってみたいと思うようになりましたね。そんなとき、ロスのコマーシャル制作会社の求人広告が目に止まりました。運よく採用になり、大学卒業と同時に渡米したのですが、この仕事が楽しくて、写真の世界からはしばらく遠ざかることになった。世界中あちこちに行けるし、豪華なホテルにも泊まれる。日本から有名人は来るし、ハリウッドの映画スターと仕事することも多かった。当時は好景気で制作費も潤沢、給料も良かった。本当に日々忙しく過ごしました。その後、いろいろ覚えたし自分でやってみようかと、勤めていた会社と同じ業種のCM制作会社を'81年、30歳のときに立ち上げました。設立後、会社は順調に回っていたんですが、人生も後半に近づき、残された時間を考えると、本当に好きなことをやっていきたいと思うようになったんです。それで45歳のとき、やっぱり写真でやっていきたいと。会社を維持しながら約五年間、作品を撮りためていきました。

永田：具体的にはどんなアクションを起こしたんですか？

渡邉：まずは作品をまとめて、ギャラリーに見てもらうよう連絡を取っていたのですが、最初はうまくいかなかったですね。モノクロのプリントには自信があったので、とにかくプリントを見てもらいたいと思いきっかけを探しました。ヒューストンのフォト・フェストというレビューに参加したとき、写真が売れて、展示のオファーが来たり、かなり良い感触が得られて、やっていけるんじゃないかと自信が持てました。

永田：会社を維持しながらとは考えなかったのですか？

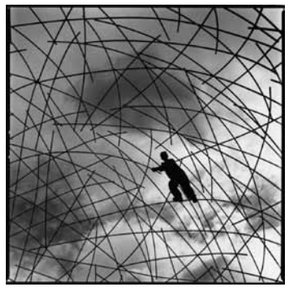
渡邉：やはり写真ひとつに集中したかったですし、アメリカはコマーシャルの仕事をやりながらファイン・アートをやることに寛容ではありません。ファイン・アートの写真家として自立している、つまり作品を制作し、販売するだけで生活しているアーティストでないと、美術館やギャラリーでは認めてもらえないんです。もちろんうまくいかない可能性もあった。だから、それなりの貯えはしましたよ。数年間は収入がなくても食べていける経済的なバックグラウンドは整えた上で挑んだということです。

永田：年齢はハンデにならなかったのですか？

渡邉：アメリカの場合、年齢はまったく関係ありません。日本はその点がちょっとおかしいですね。コンペティションに年齢制限があったりするでしょ？35歳までとか。一般企業の求人広告のように、アートの世界にそうした感覚を持ち込んでいるのは、変ですね。

永田：たしかにおかしい。日本では〝新しい才能＝若い〟という

「"Findings"」
米国で活動する日本人写真家として、現実の表層と内面を見つめたシリーズは Photolucida から Critical Mass 賞を受け、アメリカで 2007 年に出版された。



エリス島から見たツインタワーの写真は、本作の象徴的な一枚。9.11 を追悼する CD ジャケットにも起用された。

「"I see Angels Every Day"」（写真集／窓社）
エクアドルのサンザラロ精神病院を撮影した作品。

「Kabuki Players」

「周防猿回し」
日本に 1000 年以上存在する伝統芸能のひとつである、猿回しを撮影したシリーズ。

「Love Point」（写真集／冬青社）
ラブドールを撮影した作品。

「Ideology in Paradise」
北朝鮮のドキュメンタリー。本作は米国でも大きな話題となった。

ひとつのテーマに、いかに踏み込めるかということ。そうでないと、埋もれてしまいます。

う見方があるように感じます。

渡邊：永田さんと知り合ったのは、サンタフェがきっかけでしたね。

永田：そうですね。僕が海外のレビューを調べ始めた頃、レビュー・サンタフェの主催者、ローラ・プレスリーさんから前年のコンペティションでファースト・プライズを受賞したヒロシ・ワタナベの名前を聞きました。早速メールを送り、サンタフェに行く前にお会いし、いろいろとアドバイスをいただきましたね。

渡邊：コンペの作品は「Ideology in Paradise」という北朝鮮のドキュメンタリーでしたね。

永田：渡邊さんは、作品（プロジェクト）のまとめ方が非常に上手いと思いますね。アイデアがでる→リサーチをする→取材先を決める→アプローチする→そして、作品化する。長年、広告制作会社でプロデューサーとして積んできた経験が生かされているんじゃないでしょうか。日本では、なんとなく日常的に撮りためた中からピックアップして作品ですって人が多い。ひとつのスタイルが流行ると、ざーっと同じような方向のものが氾濫する。ファイン・アート・フォトグラファーは、広告や雑誌の仕事のように分業化されたものとは違う、自己完結の表現ですよね。だから、自分で自分をプロデュースしないといけない。渡邊さんはそのバランスをとてもうまくとっていらっしゃいますね。

渡邊：僕もはじめは、どこか行きたいところに行って、なんとなく撮影したんです。だんだんやりたいことが明確になってきて、プロジェクト化するやり方に変わってきました。たしかに長年経験してきたプロデューサーとしての方法論が生かされているのかもしれないと、最近思います。また、ギャラリストに作品を見せているときに感じたのですが、見る側は新しいものを見て勉強したいという思いがあるようです。よくあるテーマだったり、過去に見たものと似たようなものを見せられても当然反応は鈍くなるでしょ？だから、他の人以上にひとつのテーマに深く踏み込んだ作品を作らなければならない。そうでないと埋もれてしまいます。

「Comedy of Double Meaning」
ヴェネツィア・ビエンナーレの公式プログラム 'REAL VENICE' 展でナン・ゴールディンなど世界的な写真家とともに、唯一の日本人作家として招待され、制作した作品。

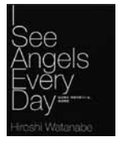
永田：日本では〝ポートレートは売れない〟と言われていますが、アメリカではどうなんでしょうか？

渡邊：欧米ではジャンルのひとつとして確立されているのではないでしょうか。著名なポートレート作家も多く存在します。絵画の世界でも、肖像画は大きなジャンルですよね。実際、僕の作品の中で一番売れたのは、歌舞伎役者のポートレートなんですよ。

永田：北朝鮮を撮ったシリーズは、売るということを意識して撮影したのでしょうか？

渡邊：いや、売るという意識はなかったですね。むしろ、売れないかもしれないけれど、撮ってみたいテーマでした。それでもギャラリーに並んだら売れた。何が売れるとか何が売れないとかは、正直言ってわかりません。たとえばセバスチャン・サルガドの金鉱で撮られた作品をギャラリーで初めて見たとき、これ、ドキュメンタリーだよね？ なぜ額装されてギャラリーにあるんだろうと不思議でした。僕はマーケティングに頼って作品制作をする必要はないと思っています。株の動きにたとえるとわかりやすいんだけど、みんなが上がりそうだと考える銘柄は、投資が集中してあまり大きく上がりませんよね。誰かが思いつくようなことは、また他の誰かも思いつくんです。こんな感じのものが売れそうだと考えても、実際のところ誰もたしかな答えを持っているわけじゃない。ならば、自分のやりたいことをやったらいいんじゃないでしょうか。ただし、どこまで深く踏み込めるかということを意識する必要があります。それと、どういった気持ちで対象を撮ったかが問われます。自分なりにしっかりとした意図で作品制作に臨むことが大切なのではないでしょうか。

ロサンゼルスにある渡邊さんのスタジオ。広いスペースに作品とデスク、暗室がある。プリントのクオリティには特にこだわっており、暗室はオリジナルの設計で現像、水洗の部分は渡邊さんの身長にあわせた特注になっている。



過去に出版された写真集から。日本国内の出版社のほか、海外からも出版の依頼があるという。オリジナルプリント付きの限定版も 250 ドル程で購入できる。

渡邊 博史

1951 年生まれ。北海道札幌出身。'75 年日大芸術学部写真学科卒業後、米国ロサンゼルスに移住。テレビ CM の仕事につく。'95 年頃から個人的な作品として写真を撮り始める。'00 年よりファインアート写真家として活動を始め、おもにアメリカで個展を行なう。
http://www.hiroshiwatanabe.com/

永田陽一（聞き手）

雑誌『遊』のフォトグラファー・フォトエディターを経てフリーランスに。『プルータス』などの雑誌やシュウウエムラ化粧品など数々の広告写真を手がけてきた。日本の写真家の海外進出や日本のフォトマーケットを豊かなものにするためにも尽力している。
http://yoichinagata.com

Fraction Magazine Japan　http://www.fractionmagazinejapan.com/